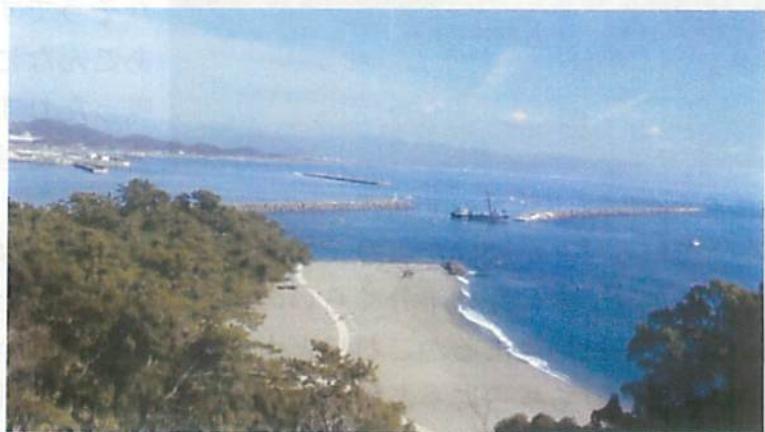


第11回視覚障害児早期教育研究会資料
実施 2010年2月6日(土)7日(日)

対談

私はこのように育ち 今の私になった

語り手 井川喜美子
聞き手 吉野由美子



(写真は大会を実施した桂浜荘から見た景色)

私はこのうに育ち、今の私になった

井川 喜美子

私の生い立ち

皆さん今日は。井川喜美子と申します。
私は、現在高知市に住んでおりますが、生まれ育った
のは、室戸市の羽根町という所でございます。国道沿
いの小さな道を少し山手に上がった所に家がありまし
て、裏には山があり、川があり、そして風の強い日には、
海から潮がとんで来るようなそんな所で育ちまし
た。



(写真1 失明前の貴美子さん)

私が失明したのは、満2歳と3~4ヶ月のころだったと聞いております。



生まれたときは色がぬけるよう
に白く、ぱっちりと澄んだ眼で、
それはそれは元気で綺麗な子だ
ったそうです。9ヶ月半になる
ともうどんどん歩き出し、言葉
ももの凄く早く喋るようになった
そうです。近所の人たちは、「ま
あこんなに早ようから歩いたり
喋ったりする子は珍しいよ」と
皆々に言ったそうです。元気

(写真2 井川さんの室戸の生家)

に遊びまわる日々が続いたようですが、2歳ぐらいになると、白まなこから黒
まなこにかけて米の芽の半分くらいの白い物がぷっと上向けにでるようにな
り、母は「これがたまるかこれほど大きな物が眼にはいって、なんとか痛かろ
う、早ようのけちゃらにやあいかん」と思い、日本手拭いの先をこよりによ
つて、ぷっとはねてやろうと思い見てみると、もうその白いものは消えてなか
ったそうです。4~5日に一回くらいの割合でそんな症状が現れるようになり、
又その頃、右足の外くるぶしのところが、2~3cm位の幅で少し硬く盛り上
がっているのに気がついたそうです。母は「これは不思議なことじゃ、どうした

ことやろう」と思い眼科を訪ねたそうです。診察をして終わると先生は大きく溜め息をひとつつき、ソファーにどかっと腰を下ろしてしばらく無言だったそうですが、「これは知らない普通の患者さんだったら、ここまでではよう言いません。けれども知った仲であり、やがては症状として現われてくるから、隠さずはっきり言いましょう。今はこうして元気に走り回っているけれど、やがて失明し、又失明だけじゃなくて熱がでて、体もあちこち悪くなってくるでしょう。私がこう言うと貴女は気が狂ったようになります、あちこちの医者を走り回ることでしょうが、いくら何軒の医者へ行っても目薬の一滴も有りません。医者へ行く金があれば、少しでも美味しい物を食べさせ一日でも長く生きさせてやってください。この子はいくら長く生きても六つまでしか生きません。おそらく六つまでも生きないでしょう。」とおっしゃったそうです。母はその言葉を聞くといても立ってもおれず、高知へ行き、何軒もの医者へ行ったようですが、その先生がおっしゃった通り注射の1本、薬の一服もなかったそうです。でもまだそのころは熱もせず元気に走り回っていたそうですが、二歳と二ヶ月ごろの旧正月の朝「早ようあたりにきなさい、囲炉裏で火が燃えゆうよ」と母が呼んだのですが「どこ、どこ」と言って手でさなぐったそうです。「こりや困った、いよいよ見えんなったもんじゃ。まあ、とにかく早よう医者へ行かにゅあいかん」と言って慌てふためいて、又最初の先生を訪ねたそうですが、先生は沈んだ顔で「ああ、やっぱりこうなったか。連れて来てくれたけれど、私としてはどうしてやることもできん、すまん、あの時私がやがてこうなると言ったでしょう。前にも言ったとおりなんの手当ての方法もありません。けれども今こうして見えなくなっていても、一ヶ月か二ヶ月位すると一時的に見えるようになるかもしれません。でも再び見えなくなったときにはもうおそらく見えるようにはならないでしょう。」とおっしゃられたそうです。

1ヶ月位見えない日が続いたようですが、又見えるようになったそうです。でも今度は日が暮れて行くようにだんだん、少しずつ少しずつ、見えなくなつていったそうです。

昨日まで見えていたものが今日は見えない、どうして見えないのか、と言って母や祖母を困らせ、又綺麗な振袖を着て鏡に映しては喜んでいたそうですが、最後にはその着物の色も見えなくなったと言って泣いて怒り、母も祖母もとても困ったそうです。「どうしてやることもできず、そのときのつらかったことはいつまでたっても忘れるることはできん」と泣きながら私によく話してくれました。でも私はその見えていた当時のことは全然憶えておりません。その後、熱がでて足がいっぱい腫れ、臍がでて痛かったこと、泣いてぐずる私を母がおんぶしてあちらこちらと歩き回ってくれたことは憶えております。

その時ハーモニカを吹いてくれたり、又「あの子はだあれ誰でしょうね、赤い

蟹子蟹ランドセル背負って、笛や太鼓に誘われて山の祭りに来て見たが・・・」次から次へと優しい声で歌ってくれました。泣いてぐずりながらも、いつしか母の背中で童謡を憶えていきました。又、長雨が降って外に行けないときは、ほんとにちっちゃな玩具のような卓上ピアノを弾きながら優しい声で歌ってくれました。その母の優しい声は今でもはっきり耳に残っております。どこの医者へ行っても手のつけようがなく、毎日毎日近くの医院へ足の包帯を巻きかえに行ったようですが、先生は「これほど腫れて、膿がいっぱいです、大変だから右足の脛から下を切り落としたらよい」と言ったそうです。祖母は「それはいかん、足を切り落として眼が見えるようになると言うのであれば切り落としてもえいが、今さら見えんようになってから後に足を切り落としたところでどうしようもない、絶対に足は切らん」と言って反対したそうです。その後は医者へ行ったところで、格別変わったこともなく、自宅で毎日消毒をして、ガーゼを取り換え包帯をまきかえることにしたそうです。毎日60本位の包帯とガーゼを洗ったそうです。母におんぶしてもらっていると、近所の人たちは「まあ可愛そうに足が痛いかね、まだ熱が下がらんかね、綺麗な子じやつに惜しいことよ」と言いながら私の頭を撫でてくれたり、コンペイトウや蒸したお饅頭を手に持たせてくれたことがありました。そんなことを繰り返す日々が四年あまり続いたようですが、 streptotomycin が使われだしたということを聞き、祖母も母も必死でそれを手に入れ、近くの医院で注射をするようになりました。しばらく続いているうちに、だんだん熱が下がり始め、少しずつ足の腫れもひきだして、膿のできるのも少なくなり、やっと母の背中から降りて自分の足で庭を歩けるようになりました。でも気がついて見ると右足の踵が地面へ着かなくなり、足先で歩くようになっていたのです。母や祖母は踵を少しでも下へ付けて歩くようにと、たびたび言いましたが踵を付けようとすると膝から下の後ろ側が突っ張って痛いものですから、いつの間にか歩きやすいように爪先で歩くようになってしまいました。でも爪先で歩いても自分の足で歩けるようになると嬉しくて、近所の子供たちと一緒に遊ぶようになりました。祖母と母は「目が見えなくなったことをいくら泣いて悔やんでいても始まらない、とにかく前向きに生きるしかない、この子はなるべく人中へ連れ出し、又触れるものは触らし、匂える物は匂わし、体で身をもって覚えさせていくようにしよう」と話し合ったそうです。

それからはますます近所の子供たちと遊ぶようになりました。夏、夕方涼しくなると皆でお弁当を持って浜へ行き、食べ終わると子供たちと一緒になるべく平たいような石を拾って積み上げて、その上に子供たちが順番に一人ずつ上がって歌を歌うのです。私も母の背中で聞いて憶えた童謡を次々と歌いました。歌い終わると周りの大人たちが手をたたいてくれ、飴やお煎餅を貰って嬉しか

ったことを今でもはっきり憶えています。又、盆踊りにも連れて行ってもらい、私も子供たちといっしょに足を上げたり手を振ったりしているとお菓子や団扇を貰い、とても嬉しかったです。又、母は庭で沢山の花を作ってくれ、触らせてもらひ匂わせてもらって、矢車草、スター、金魚草、次々と名前を覚えていきました。母も祖母も「物に触るときは初めはそーと優しく触らんといかん、初めから、がいにぐしゃっと掴んだら茎が折れたり花びらが散ったりするきに、初めはそーと手を持っていき、それから触り始めたら、がいに触つて良いものか悪いものかがわかるき、その力加減を気をつけなさいよ」といつも注意してくれていました。矢車草の大きくなつた蕾には小さな子髭がいっぱい付いています。その子髭を指でこしこしつと擦った感触と猫の小鼻周りの子髭を擦った感触が良く似ているなと思いました。



又、祖母は近所の子供たちと麦畑へ麦踏みに連れて行ってくれたり、砂糖黍の皮をはぎに連れて行ってくれたりして、そんな日々が続いておりました。やがて近所の子供たちはだんだん幼稚園や学校に行くようになり私は昼間友達がいなくなり、どうして私は幼稚園へ行けないのかと母や祖母を

(写真3と4 キーウイの原種 右は割って見た所《家のそばに生えていた》)

困らせました。母に絵本を読んでもらったり、お弁当を作つてもらって庭で食べたりしましたが、友達がいなくなり本当につまらなく、寂しいなあと思う日々が続いていました。そんなある日、佐野先生という方が来てくださいり、私を抱き上げ優しい声で「盲学校へおいで。お目目の見えんお友達がいっぱいいて、お歌を歌つたり遊んだりできて楽しいよ。」と言ってくださいました。私は「行きたい」と言いました。「今度お迎えに来るから一緒に行きましょうね。」と言って帰られましたが、その時の先生の優しい声はいつまでも忘れる事はありません。

小学生時代の出来事

おかげで、昭和29年に盲学校へ入学することができました。病気のため、2年遅れの入学でした。踵が下へつかないために、きをつけをすることができなかったり、お遊戯がうまくできなかつたり、友達と同じ靴がはけなかつたり、いろんな不自由なことがありました。それでも皆と一緒に平均台を渡つたり、運動会でも走ることができ、友達もいっぱいできてとても嬉しかったです。理科の時間に先生から「貴方は花の名前をよく知っていますね。」と褒められたことがありましたが、母からたくさんの名前を教えてもらつていて良かったな

あと思ったことでした。



(写真5 運動会風景)



(写真6 遠足の様子)

学校が休みになると家に帰りましたが、祖母は「家の中へこもっておったらいかん、ちっとでも多く外へいかにやあいかん」と言ってあちこち連れて行つてくれました。

水車

春休みのお天気の良いときは、毎日のように野原や山へ、蕨やいたどりを取りに連れて行ってくれました。お茶瓶やお鍋、ご飯、それにお味噌を持って行き、枯れ枝をいっぱい集めて火を焚き、お昼には取れたちのタラの芽を焼いたり、お鍋でじやあじやあといたどりを炒ってお味噌を付けて食べました。お箸の代わりにシダや茅の茎を使い、椿やしゃしゃぶの葉っぱを取ってきて、火でバリバリッとあぶってお茶の葉の代わりにして飲みました。祖母がいたどりの伸びすぎて堅くなったものを取ってきて、「これで水車を作るきに回してみいや」と言って水車を作ってくれました。その水車は、いたどりの節を真ん中にして、15cm位の長さに切り、両端を4~5cmの切り込みを入れ、水につけます。

しばらくつけておくと切り込みを入れた部分がくるっと外側に反ります。それを細い竹に挿して、水の流れているところへもっていくとくるくると回りました。いたどりの大きさにより、水車の大きさも変わってきます。祖母が「これが水車の一番小さい見本ぞね」と言って触らせてくれました。



(写真7と8 イタドリで作った水車)

丸木橋

山道は細くせまいので、2人が手をつないで行けるところはほとんどありません。山へ行くとき祖母はいつも紐を持って行き、狭い道にさしかかると腰に紐をくくりつけ、私はその紐に掴まって後ろから歩いて行きました。あちこち行きましたが、なかでもいちばん印象深く思い出されるのは丸木橋を渡ったことです。四年生の春休みでした。その日もいつものように祖母の腰紐に掴まって山道を登って行っていたら、ザーザーと水の音が聞こえ出し、だんだんその音が大きくなってきました。祖母は「あっ」と言って立ち止りました。「どうしたが？」と聞くと「滝があって丸木橋がかかっちゃう、さてどうしよう。」と言いました。祖母は黙って考えていましたが、「あついが荷物を全部先に運んで行ってくるきに、おまんはここにおりよりよ」と言って先に荷物を持って行き、私のところへ帰って来た祖母は、「あついが先に這うきに、おまんはあついの後ろをついて這うてきい」祖母が先に這ったので私もついて這いました。「両手で丸木をしっかりとおさえて、ごぞごぞ這うてきいよ」と言いました。両方のすねを並べるとふちに余りはほとんどありません。ザーザーと水の音が遠くに聞こえるのでかなり下まで「遠いなあ、怖いなあ」と思いましたが、祖母が前を這っているので、私も一生懸命でついていきました。だいぶ渡ったように思い「まだ？」と聞くと「まだまだ慌てるこたないき、ごぞごぞついてきたらえい」と言いました。「あ～あまだながや。なかなか遠いなあ」と思いながら片方の手をそーっと前へ出し、祖母の草履の裏を触り、祖母が前にいることを確かめながら這いました。「さあ着ついた、ここで終わりじゃ」と祖母が言ったので、「あー、良かった」と思わず大きな声で言いました。無事渡り終えて本当にほっとしました。地面に立ったときしばらく足が震えていました。いたどり、タラの芽、椎茸など沢山取りお昼ご飯を食べましたが、「又あの橋を渡らんといかん」と思うといつものように美味しい昼ご飯ではありませんでした。しばらく遊んでいましたが、「さあ、そろそろ、いにじあいをしょうか」と祖母が言ったので、荷物をまとめて山を下りました。ザーザーとあのいやーな水の音が聞こえ出し、「また渡らんといかん。いややなあ。」と思っていると、「さあまた頑張って這っていのう」という祖母の声とともに、しっかりと掴まって一生懸命で這って渡りました。「さあここで終わりじゃ」という声を聞くと「あーやっと渡り終わった。もうこれで怖いところはないき、くつろいだ」と思い安心しました。後から聞いた話では、丸木橋の長さが6～7m、高さが14～15mあったそうです。その当時この橋を使って仕事に行っておられた人たちが、今でも何人かお元気でおられますので、つい最近もその話がでて「あんたのお祖母さんはえらかったねえ。あたしらあでもあの橋を渡るがは恐かっ

たが。それにもし下へ落ちたら助けにいこう、すっすと行けるようなところじゃなかったき。あんたを連れてよう渡ったこと。なんでも経験をさしちょっちゃろうと思ったお祖母さんは、なかなか偉かったよ」と言って話したことでした。できることならもう一度あの場所へ行って触ってみたい、恐かったけれどもう一度渡ってみたいと思うことがあります、今では全然通ることができなくなりもうその場所へ行くことはできないそうです。

雷

5年生の夏休みに入った早々のことです。祖母が「おまんが戻る前に太い雷が鳴って、愛宕神社の樹に落ちて、切り倒してあるきに、片付けられんうちに触らしちゃりたいきに早よう行こう」と言って神社に行きました。大きな樹が横倒しになっていて、触ってみるとかなりの長さに裂けて、ささくれ立ったようにギザギザになって縁のほうが焼け焦げ、そこを触るとボロボロ崩れ落ちるところがありました。雷が落ちたらこんなにも大きく裂けてしまうものかとびっくりしました。祖母が「昔の人は、雷は虎のようにするどい爪があり、その爪で樹にかきあがっていたもの」とよく話していました。その話を聞く度に、わたしはそんなはずはないと笑っていましたが、雷が落ちたギザギザに裂けた樹を触ってみると「まことにそのとおり。昔の人の言うとおり」と思ったことでした。

潮の満ち引き



(写真9 すっかり潮の引いた浜辺)

これはドカッと深いところはないき、ちっとずつちつとずつ坂になっていちゅうき、怖いところはない。岩を伝いもって前へ前へ進んでいきよ。」と祖母に言われ、私は岩を伝いながらゴトゴトと沖へ沖へ向かって行きました。途中岩の下へ手を回してみると貝がいっぱいおりました。貝は陽があたって暑くなると岩の下のほうの湿った所に、隠れているもんだなということをこの時始めて知りました。クボやマイゴをいっぱい取りました。ウニやヤドカリもあり、ウミ

5年生の夏休みのある日、祖母が「潮がこんだり引いたりするというけんど、おまんは見えんき、どれればあ引いちゅうもんやら、わからんろう。今日はうんとよう引いちゅうき、どこまで行けるか自分の足で確かめてみたらえいき。早よう行こう。」と言って、早速、海へ行きました。「こ